



スコットランド問題から考える 少数派のアイデンティティー

小松 啓一郎 (こまつ けいいちろう)
コマツ・リサーチ・アンド・アドバイザー 代表

ヨーロッパでの素朴な疑問

日本の女子高校生たちがチェックのスカートにハイソックスを履いて歩く姿を見ると、思い出すことがある。初めてロンドンに行った時の筆者は、たまたま目にしたスコットランド人の男性グループのキルト姿に驚いた。それは、逞しい男性たちがチェックのスカートにハイソックス姿(実際には民族衣装キルト)でバグパイブを吹いたり、行進したりする姿であった。スーツ姿の英国紳士たちが闊歩する雑踏の中では特に目立つ存在であった。思わず、「あの人たちは誰だろう?」と周りに聞いた。これは、筆者が満4歳の時の出来事であった。

当時、筆者は旧西ドイツの首都ボンに勤務する父の都合により、その郊外のドッテンドルフ(ドッテン村)という田舎に住んでいた。言うまでも無く、この田舎の村の住民のほとんどは典型的な金髪に青い目の人々であった。ただし、自宅の隣り近所だけは一風変わった所だった。



チェックのスカート(民族衣装キルト)にハイソックス姿でバグパイブを吹くスコットランド人男性
出所: The Daily Beast, 2014年9月18日

その地区には、各国の外交官らが住んでいたため、左隣りはイラク人、右隣りがオーストリア人、その右隣りがインド人、その右隣りはブラジル人、そして、その右奥にはスペイン人といった状況だった。新たに引っ越して来た子供のほとんどは当初、ドイツ語が全く話せない。

しかし、子供のことであるから言葉の習得は非常に早い。イメージとしては、3か月も経てば片言のドイツ語ながらも一緒に遊べるようになる感じだった。新しい友達が現れれば、言葉が通じなくても「3か月の我慢」と思っていた。そして、あれだけの異文化ショックに日常的に接していたせいも、筆者の脳裏には3歳から5歳くらいまでの記憶がかなり残っている。「次には、どんな国から、どんな文化の友達が現れるのだろうか」という期待感さえあった。



筆者の四歳の誕生日に4本のローソク(右端)と家族(左端から父、弟、母)

そんな時期、たまたま家族旅行でロンドンに行き、キルト姿のスコットランド人に出会ったのだった。父親の説明によれば、「あれはイギリス人だけれども、スコットランド人と呼ばれていて、周りのイギリス人とは違う人たちだ」という。その瞬間、幼少の心の中には現在にまで続く大きな疑問が生まれた。

■ 人の違い、文化の違い

「イギリス人であるが、スコットランド人である」、あるいは「イギリス人であるが、イギリス人とは違う」とはどういうこと

なのか。隣り近所では、ドイツ人がドイツ語を話しているのは当然としても、ブラジル国籍の友だちはポルトガル語を話し、スペイン国籍の子供はスペイン語を話していた。もしも、スコットランド人が独自の文化や言葉を持っているのであれば、「スコットランドという国家」が無ければ不自然なのではないか。あるいは、イギリス人なのであれば、「他のイギリス人と違う」というのも、よく分からなかった。

筆者自身、大人に近所のスーパーに連れて行ってもらった時も、少し離れた公園に遊びに行った時も、周りの子供のほとんどが金髪・碧眼であるのに対し、自分の家族だけが黒髪・黒目であるのが不思議だった。隣り近所に色々な国籍の住民がいるとは言っても、日本人以外には東洋系の人々がおらず、全員が彫りの深い顔立ちをしていた。どんなに周囲の人々が親切であっても、この違いは心の深いところで孤独感となっていた。

いよいよ、帰国の日が近づいた頃、大家のディムケさんが訪ねてきて、「日本に行けば、啓タン(当時の筆者のあだ名)のように黒髪・黒目の人たちがたくさんいるよ」と教えてくれたが、本当にそんな珍しい国があるのかどうか、俄かには信じ難かった。しかし、実際に羽田空港に到着してみると、黒髪・黒目の人々ばかりであった。「こういう国があったのか」と驚いた満5歳当時の安堵感と開放感は今でも忘れられない。

■ 似て非なる、東西パキスタン

小学校6年生になった頃、既に日本語に不自由しなくなっていた筆者は、首都の置かれている西パキスタンから遠く離れた東パキスタンという別の地域が「同じパキスタンという国家の一部」だと習ったことがある。しかし、東西パキスタンの民族は全く違うのだという。その時、筆者には東パキスタンのバングラ人たちが「あの孤独感」を味わっているように感じられてならなかった。そして、思わず、教室の中で、「それなら東パキスタンはいつか独立することになるはずだ。でなければ、その住民は永久に解決できない孤独感の中に生きていくことになる」と発言してしまった。これに対して、まだ12歳だった筆者に対しては、「西パキスタンの人たちが東パキスタンの人々に親切にしてくれて仲よくしていけるのだったら、何も問題無いではないか」という声が圧倒した。周囲に居住する人々がいくら親切にしてくれても、自分がその周囲の人たちと